

(2) コケ植物(蘚類)

レッドリストに掲載された各植物について、種ごとに形態的な特徴や分布、県内の状況等を解説した。記述の項目、内容等は以下の凡例のとおりとした。準絶滅危惧種についても、これらが目にふれる機会が多いことを考慮し、絶滅危惧種と同じ様式で記述した。

【掲載種の解説(コケ植物 蘚類)に関する凡例】

【分類群名等】

対象種の分類上の位置を示す門、綱、科名等を各頁左上に記述した。科の範囲、名称、配列は「日本の野生植物 コケ」(平凡社,2001)に準拠した。科内の配列は、学名のアルファベット順とした。

【評価区分】

対象種の愛知県における評価区分を各頁右上に記述した。参考として「植物Ⅱ(維管束植物以外)レッドリスト」(環境省,2007)の全国での評価区分も各頁右上に記述した。また、各評価区分に対応する英文略号も同じ場所に記述した。

【和名・学名】

対象種の和名及び学名を各頁上の枠内に記述した。和名及び学名は、原則として岩月善之助編「日本の野生植物 コケ」(平凡社,2001)に準拠した。学名の異名は()内に記述した。学名の著者名の略し方は、「Brumitt, R. K. & C. E. Powell」(1992)に準拠した。

【選定理由】

対象種を愛知県版レッドデータブック掲載種として選定した理由について記述した。

【形態】

対象種の形態の概要を記述した。一部の種について写真またはスケッチを掲載した。

【分布の概要】

対象種の分布状況について、県内・国内・世界での概要を記述した。また、本調査及び平成9年度から平成12年度にかけての「レッドデータブックあいち2001植物編」作成時の調査において、対象種の生育が現地調査、文献調査及び標本調査によって確認された地域のメッシュ(標準地域メッシュ・システムにおける5倍メッシュ)を県内分布図として掲載し、現地調査による確認地域、文献調査または標本調査による確認地域を●印で表示した。なお、同一メッシュ内に含まれる産地が複数であっても1点として表示した。

【生育地の環境/生態的特性】

対象種の生育地の環境条件及び生態的特性について記述した。

【現在の生育状況/減少の要因】

対象種の愛知県における現在の生育状況、減少の要因等について記述した。

【保全上の留意点】

対象種を保全する上で留意すべき主な事項を記述した。

【特記事項】

以上の項目で記述できなかった事項を記述した。

【引用文献】

記述中に引用した文献を、著者、発行年、表題、掲載頁または総頁数、雑誌名または発行機関とその所在地の順に掲載した。

【関連文献】

対象種に関連する文献の内、代表的なものを、著者、発行年、表題、掲載頁または総頁数、雑誌名または発行機関とその所在地の順に掲載した。

【 蘚類 執筆者 】

岩月善之助

今回の記述の中で、初版（レッドデータブックあいち 2001 植物編）の発行後に新しい知見の無い部分の多くについては、初版を執筆された故高木典雄氏の文・データ等を引用させていただいた。

【 蘚類 調査協力者 】

次の方々に現地調査、標本提供、資料参照等で協力していただいた。

大家顕雄 鈴木 直 寺尾恭平 成田 努 山田耕作

国立科学博物館 名古屋大学博物館 服部植物研究所 鳳来寺山自然科学博物館

(敬称略)

クロゴケ *Andreaea rupestris* Hedw. var. *fauriei* (Besch.) Takaki

【選定理由】

本種は高山蘚の代表にされるように、日本では高山帯に広く分布するが、寒冷気候の存在する所であれば例外的に低標高の岩場にも出現する。愛知県茶臼山の頂上附近（標高1,415m、県内最高点）で記録されたのはその1例で、県内蘚類フロアの性格を示す一つの指標として重要である。

【形態】

高さ1～2cm、黒褐色の小蘚。葉の形は中央部がくびれてバイオリン状になる。雌苞葉は通常の葉よりずっと大きく鞘状になる。蒴は成熟すると縦に4裂するが上端は離れず行灯（あんどん）に似た形になる。蒴のこの形状は蘚類の中で極めて特異なもので、分類学上、科や目の段階を越えてクロゴケ亜綱を形成する。

【分布の概要】

【県内の分布】

唯一の産地は茶臼山の頂上附近（標高1,415m）の地点。

【国内の分布】

北海道から本州、四国、九州にかけて分布する。四国、九州では標高の高い所にのみ生育する。

【世界の分布】

世界各地に分布するが、日本のものは変種として扱われる。

【生育地の環境 / 生態的特性】

高山帯の岩面に普産するが、岩石は概ね火山岩で石灰岩上には生育しない。局部的に同じ条件が満たされる場所であれば、稀に低標高の所からも記録される。県内における唯一の産地である茶臼山の頂上附近（標高1,415m）はその一例であり、火山岩上に稀産する。

【現在の生育状況 / 減少の要因】

生育地は茶臼山頂上附近の岩礫地帯であり、現状では登山道工事などで改変された形跡も特にないため、精査すれば生育が確認できるものと思われる。

【保全上の留意点】

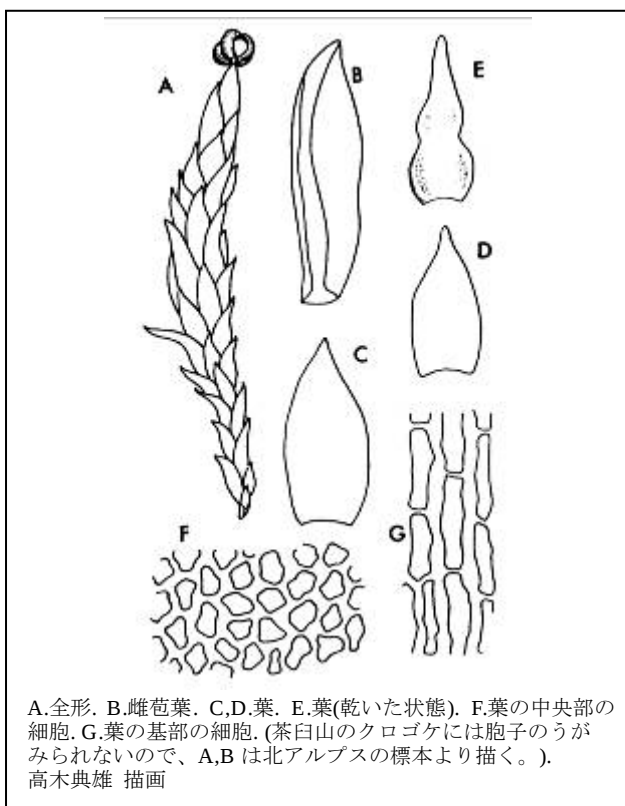
生育地は天竜奥三河国定公園の中にあり地域的には保護の対象となっているが、茶臼山の頂上附近（標高1,415m、県内最高点）で、登山者の集中するところでもある。このため、登山道や展望台の施設工事等で絶滅するおそれもあり、現状改変には注意を要する。

【特記事項】

愛知県の蘚類フロアの中に、日本中部高山帯からの南下、下降をする北方要素が含まれることを示す資料として重要。

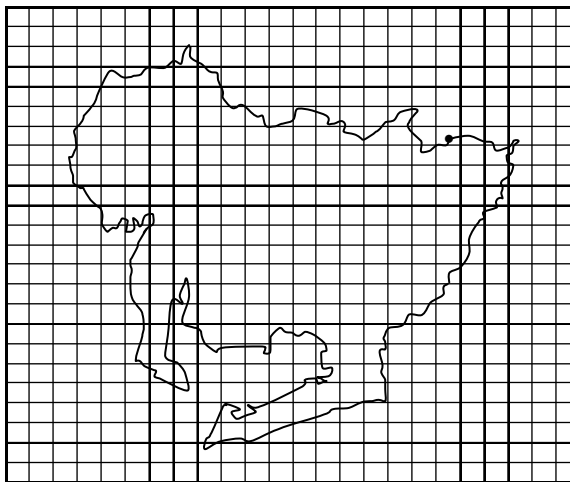
【関連文献】

高木典雄, 1982. 茶臼山の蘚類植物. 鳳来寺山自然科学博物館館報, 16: 1-6.



A.全形. B.雌苞葉. C,D.葉. E.葉(乾いた状態). F.葉の中央部の細胞. G.葉の基部の細胞. (茶臼山のクロゴケには孢子のうがみられないので、A,Bは北アルプスの標本より描く。).
高木典雄 描画

県内分布図



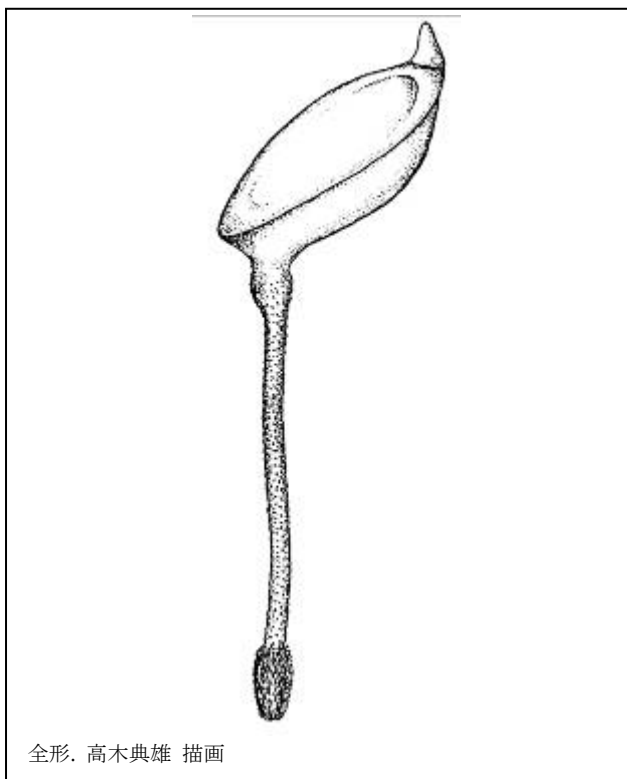
ウチワチョウジゴケ *Buxbaumia aphylla* Hedw.

【選定理由】

本種の日本における主産地は北海道から中部日本にかけての主として亜高山帯であり、全国的には決して珍しい種ではないが、愛知県では今迄に只一ヶ所北設楽郡設楽町の標高 900m の低地から記録され、以後県内のどこからも記録されていない。分布上きわめて珍しく、種の生育限界を示すものとして重要である。

【形態】

本属のものは、配偶体はほとんど発達しないのに対し、孢子体のみが特異な形態に発達する。本属には日本では他に 1 種クマノチョウジゴケが知られているのみである。



全形. 高木典雄 描画

【分布の概要】

【県内の分布】

唯一の産地は北設楽郡設楽町の標高 900m の地点。

【国内の分布】

主として北海道から中部日本にかけて亜高山帯の針葉樹林に生育する。中部以南では紀伊半島や中国地方の数ヶ所、四国では石槌山、九州では熊本県に 2 ヶ所知られている。

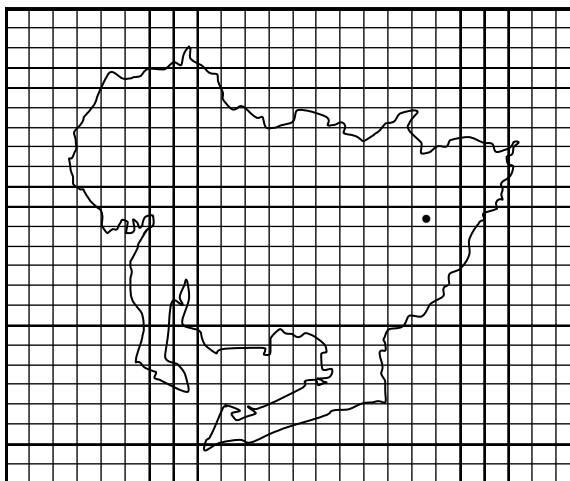
【世界の分布】

欧州から北米、シベリア、アムールなど、北半球の寒冷地、更に飛び離れてニュージーランドよりも報告がある。

【生育地の環境 / 生態的特性】

中部日本では上述のように主として亜高山帯に生育し、登山道に面した斜面の土上に点在する。県内では前述の場所に只一度、2 個体が路傍のゆるやかな土の斜面に生育しているのが記録されている。

県内分布図



【現在の生育状況 / 減少の要因】

県内での最初の記録は 1950 年 1 月 22 日、前述の場所においてのことであるが、その後現地では消滅し、以後、県内のどこからも記録されていない。

【保全上の留意点】

県内では、北設楽郡の 1 地点で記録されただけで、その後、現地はもとより、県内の他の地点でも記録されていない。新しい産地の記録が期待されると同時に、その生育がどのような条件と関係しているのかを明らかにする必要がある。

【関連文献】

高木典雄, 1988. 東三河産キセルゴケ類の蘚類. 鳳来寺山自然科学博物館館報, 18: 19-26.

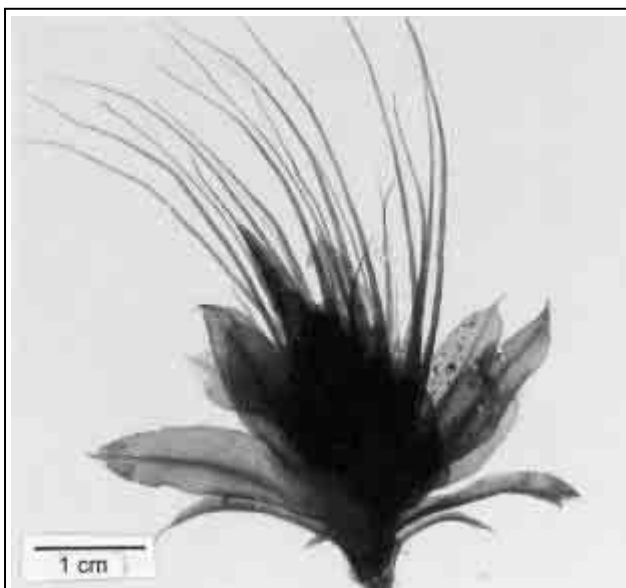
リュウキュウイクビゴケ *Diphyscium mucronifolium* Mitt. (Syn. *D. involutum* Mitt.)

【選定理由】

イクビゴケ属は県内に5種が知られているが、その中で本種は現在只2ヶ所、豊橋市石巻山の石灰岩上と乳岩溪谷の岩上から記録されている。本州南部から沖縄を経て東南アジアと北米東部に分布する暖地系の蘚である。

【形態】

県内に普産する同属のイクビゴケ *Diphyscium fulvifolium* と似ているが、リュウキュウイクビゴケは葉形がへら型で、葉身上部で最も幅が広く、葉身細胞は乳頭がなく平滑なことで区別できる。



愛知県川合, 岩月善之助 No.76.

【分布の概要】

【県内の分布】

県内の産地は豊橋市石巻山と乳岩溪谷である。

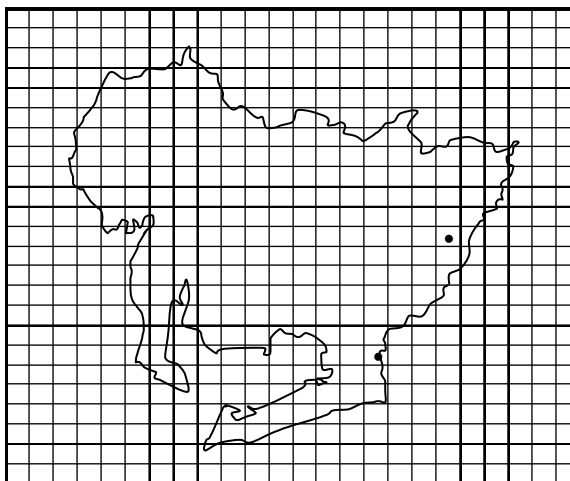
【国内の分布】

本州南から沖縄へ分布（リュウキュウの名はこれに基づく）する暖地系の蘚類。

【世界の分布】

東南アジア、北米東部に分布する。

県内分布図



【生育地の環境 / 生態的特性】

石巻山中腹以上の日陰の石灰岩上及び乳岩溪谷の岩上に暗緑色のマットを作って生育している。

【現在の生育状況 / 減少の要因】

石巻山には中腹まで舗装道路や諸施設があり自然状態が改変されているが、頂上一帯の石灰岩地域は陰阻な地形ということもあり、比較的自然状態が保たれていて、本種も残存している模様である。

【保全上の留意点】

石巻山一帯は石巻山多米県立自然公園として保護されているため、今後も環境上の大きな変化はないと思われる。しかし、蘚苔類は局所的な改変によっても消滅する可能性があるため、注意深く見守る必要がある。

スズキイクビゴケ *Diphyscium suzukii* Z.Iwats.

【選定理由】

本種は1976年に静岡県掛川市で発見され、その後四国からも報告されたが、極めて稀な種である。近頃本種が愛知県の乳岩溪谷にも生育することがわかった。絶滅危惧種として保護すべき種と考える。

【形態】

植物体は小型。雌雄異株。葉は舌状で長さ3-5mm、茎の頂部の蒴の下にある雌苞葉は長く突出する中肋を持ち、葉身の上部は多くの長い毛があることが特徴である。

【分布の概要】

【県内の分布】

県内で知られている産地は乳岩溪谷のみである。

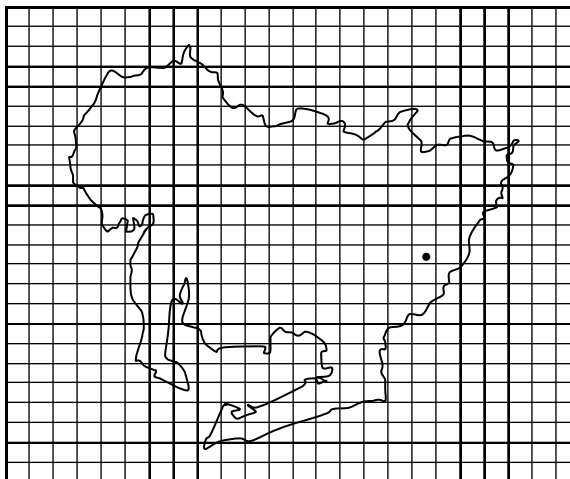
【国内の分布】

静岡県、愛知県のほかには、四国の1ヶ所のみから知られている。

【世界の分布】

日本の固有種である。

県内分布図



【生育地の環境 / 生態的特性】

県内既知の産地は自然度の高い溪谷の岩の上である。

【現在の生育状況 / 減少の要因】

本種の群落は小さく、周囲の環境の変化によっては、容易に消滅する心配がある。

【保全上の留意点】

林内環境の変化にも敏感であるため、周囲の環境の保全には細心の配慮が必要である。

【関連文献】

Iwatsuki, Z., 1976. Bryological miscellanies. XXI-XXII. J. Hattori Bot. Lab., 139-149.

マルバホウオウゴケ *Fissidens diversifolius* Mitt.

【選定理由】

ホウオウゴケ属の種の葉は、アヤメのように下半部が2重になって茎を抱く。本種は石灰岩上に生育し、愛知県では新城市桜淵公園のみから知られている。この場所が本種の分布の北限と考えられ、保護すべき種である。

【形態】

岩上または地上に生える。茎はふつう長さ5mm以下。葉の下半部が2重になるが、その部の葉縁に細長い細胞からなる舷がある。葉身細胞は方形-六角形、長さ6-10 μ m、平滑でいぼはない。雌雄同株。蒴柄は茎の頂端につき、蒴は直立。



新城市桜淵, 鈴木 直 No. 98021.

【分布の概要】

【県内の分布】

新城市桜淵公園の1個所のみ。ここが本種の分布の北限と考えられる。

【国内の分布】

本州、四国、九州に分布するが、産地は多くない。

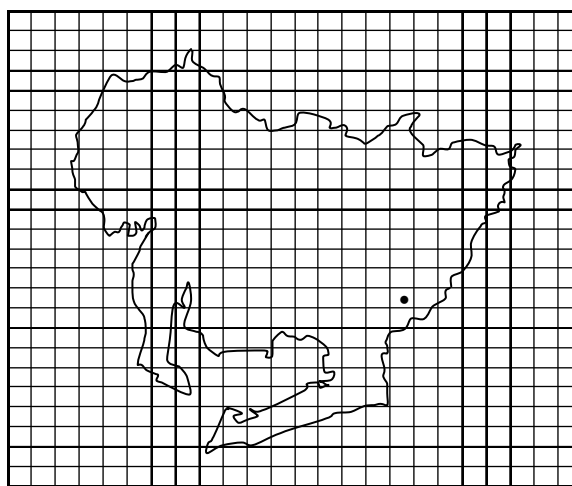
【世界の分布】

インド、ミャンマー、中国に分布する南方系の種である。

【生育地の環境 / 生態的特性】

県内唯一の産地である桜淵公園では、増水すると水没するような場所の、水に近い石灰岩の上に生育している。現在は桜淵公園の中の1個所のみに見つかっているが、さらに調査が必要である。

県内分布図



【現在の生育状況 / 減少の要因】

県内の桜淵公園の生育地は非常に不安定な環境にある。洪水などで流される心配がある。

【保全上の留意点】

なるべく人為の及ばない状況で、注意深く生育状況を見守る必要がある。

【関連文献】

Iwatsuki, Z. & T. Suzuki, 1982. A taxonomic revision of the Japanese species of *Fissidens* (Musci). J. Hattori Bot. Lab., 51: 329-508.

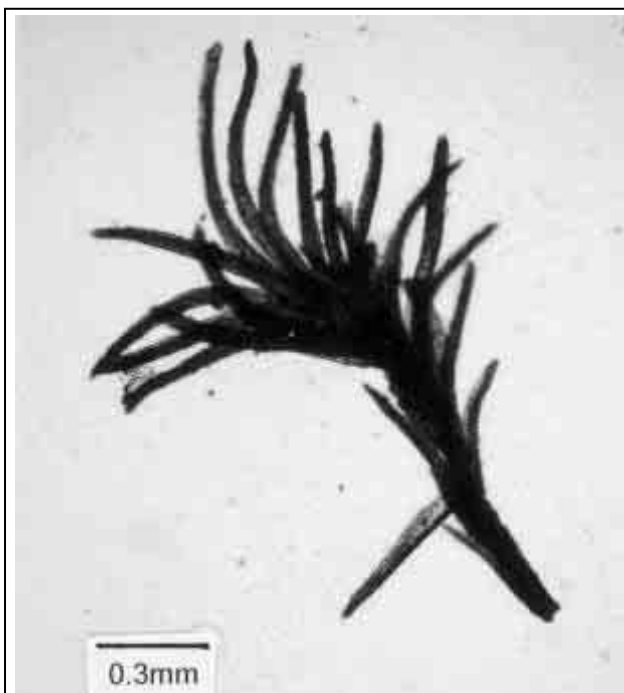
サンカクキヌシッポゴケ *Seligeria patula* (Lindb.) Broth.

【選定理由】

本属は蘚類の中で最も微小な仲間で、生育地は石灰岩地に限られる。県内での既知の産地は1ヶ所にすぎない。分布上貴重な種であるため、絶滅危惧種として保護すべき種と考える。

【形態】

微小で茎は長さ僅かに1–2mm、葉は長さ0.7–1.2mm。蒴は西洋梨型で相称、蒴歯は16本、蓋には斜めに突出するくちばしがある。胞子は径10–13 μ m。



石巻山, 岩月善之助 No.165.

【分布の概要】

【県内の分布】

県内で知られている産地は石巻山の1ヶ所のみ。

【国内の分布】

本州（岩手県以南）、四国、九州の石灰岩地にのみ分布する。

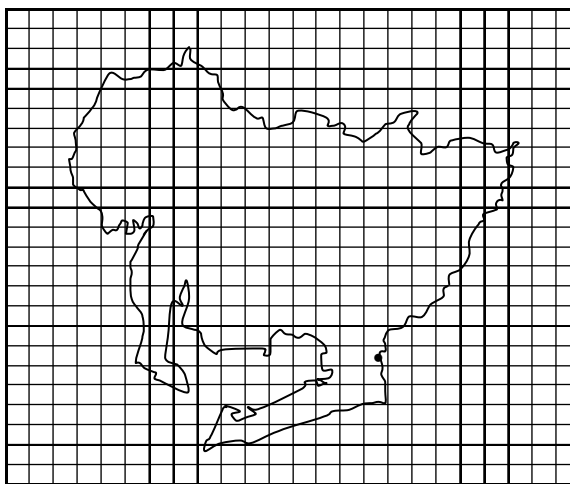
【世界の分布】

ヨーロッパに分布する。

【生育地の環境 / 生態的特性】

石灰岩の上にまばらな群落を作って生育するが、植物体が小さいので、初心者では見つけることが困難な場合が多い。

県内分布図



【現在の生育状況 / 減少の要因】

県内では石巻山の石灰岩上のみに生育する。標本は何点か知られているが、現状を調査する必要がある。

【保全上の留意点】

植物体が微小なため、本種の生育を知らずに環境の破壊が行われる可能性がある。本種の産地の環境の保護には、この点にも留意する必要がある。

【関連文献】

Suzuki, T., Z. Iwatsuki & H. Kiguchi, 2006. The family Seligeriaceae (Bryopsida) in Japan. J. Hattori Bot. Lab., 100: 469-493.

イボマツバゴケ *Leucoloma okamurae* Broth.

【選定理由】

日本固有種で本州、四国、九州に分布する。本州といっても中部以南が主産地で鳳来寺山頂（新城市、695m）が本県では唯一の産地。ここは日本における分布の北限線上にあるものとして重要である。

【形態】

本種の属するマツバゴケ属 (*Leucoloma*) の種の葉は葉縁が舷とよばれる透明な細長い細胞列で縁取られているのが特徴。日本産の本属には他にもう一種マツバゴケ (*L. molle*) があるが、より大型で茎の下部の葉がよく脱落し、中肋ぞいの葉身細胞には全面に小さな乳頭がある。イボマツバゴケは小型で葉は脱落せず葉身細胞には大きな星形の乳頭が縦に並んでいる。和名のイボはこの特徴に基づいている。

【分布の概要】

【県内の分布】

唯一の産地は鳳来寺山頂（新城市）の標高約 695m の地点。

【国内の分布】

本州中部以南、四国、九州に分布する。

【世界の分布】

日本固有種である。対照的に同属の一種であるマツバゴケは九州以南から沖縄、台湾を経てフィリピン、インドネシアに分布する。

【生育地の環境 / 生態的特性】

県内唯一の産地である鳳来寺山頂では、アカマツの樹幹に着生していた。本種は暖地系の種で、林内陰地の樹幹や朽木上に群落を作る場合が多いが、鳳来寺山のように山頂近くの半陰地で、しかもアカマツの樹幹に確認されたという例は珍しい。

【現在の生育状況 / 減少の要因】

県内唯一の産地は鳳来寺山頂（瑠璃山、標高 695m）で、アカマツの樹幹に着生していた。周辺は半陰の疎林であったが、山頂一帯は環境が変わり、このアカマツも消滅し、イボマツバゴケも共に消滅してしまった。現在のところ、愛知県では第 2 の産地はまだ見つからない。

【保全上の留意点】

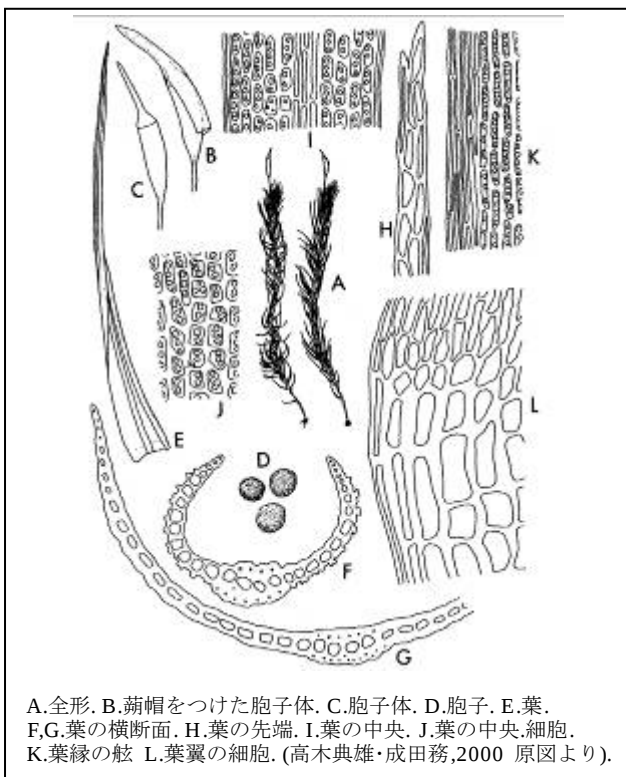
樹幹着生の種は、その生育を支えている母樹そのものが消滅すると消滅するため、母樹そのものの保護が重要である。また、新たな産地発見の可能性は残されているため、県内における第 2、第 3 の産地の発見が望まれる。

【特記事項】

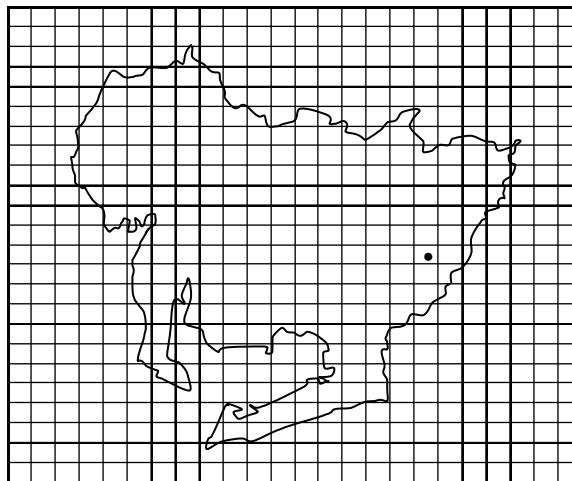
暖地系の蘚で、本種が愛知県で見出されていることは愛知県の蘚類フロラの性格を示す重要な資料になる。

【関連文献】

高木典雄・成田務, 2000. 姿を消したと思われる鳳来寺山蘚類の 3 種. 鳳来寺山自然科学博物館館報, 29: 5-10.



県内分布図



イサワゴケ *Syrrhopodon tosaensis* Cardot

【選定理由】

葉の形態が、極めて特徴的なアミゴケ属の種で、その分布も限られている。県内での既知の産地は2ヶ所にすぎない。分布上貴重な種であるため、絶滅危惧ⅠA類の選定種とする。

【形態】

灰緑色の小型の蘚で、樹幹上や岩の上にややまばらな群落を作る。茎は長さ6–10mmくらい、葉は披針形で、縁には透明な2–3細胞列の舷がある。葉の基部は幅広く、中肋の両側に矩形一方形の、大型透明な細胞群があるのがこの属の特徴である。蒴は稀。

【分布の概要】

【県内の分布】

県内に知られている産地は乳岩渓谷及び犬山市の2ヶ所のみである。

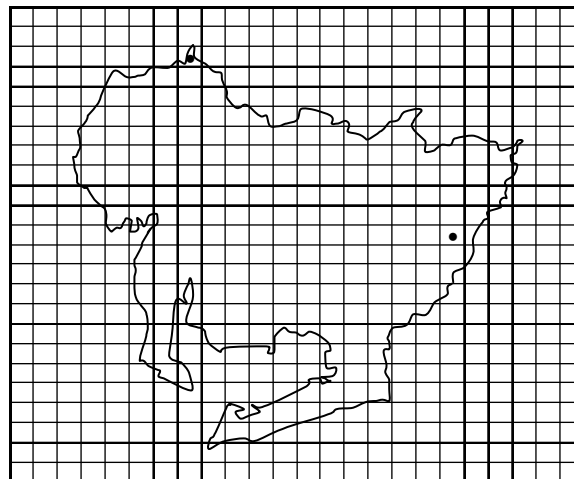
【国内の分布】

本州中部地方以西、四国、九州、琉球列島。

【世界の分布】

中国に分布する。

県内分布図



【生育地の環境／生態的特性】

県内では自然度の高い樹林内の樹幹や岩上に生育する。乳岩峽では時に杉の幹にも生育する。

【現在の生育状況／減少の要因】

県内既知産地は乳岩峽及び犬山市の2ヶ所のみ。乳岩峽では以前よりかなり減少したと思われるが、おそらく林内環境の乾燥化によるものと思われる。現在は小型の群落のみが見られる。

【保全上の留意点】

林内環境の変化に敏感であるため、その保全には細心の配慮が必要である。

ヒカリゴケ *Schistostega pennata* (Hedw.) F.Weber et Mohr

【選定理由】

日本では本州中部以北の高地に広く分布し、原糸体が光を反射して光ることで衆知の種である。県内では只1ヶ所、最高点の茶臼山（1,415m）のみに産し、日本における分布の南限線上にあることで、種の生育限界を示すものとして重要である。

【形態】

極めて小型の蘚で、配偶体は薄緑色、なよなよとしたもので、葉は茎の中央以上に平たく左右2列に着くが、葉の基部は下延して下の葉と融合する。蒴柄は細く緑色、蒴は小さくて球形、原糸体はレンズ状の細胞が平面に並び入射光がこの細胞の底で反射しエメラルド状に光って見える。蘚の中では他に例のない特殊な形態をもつことで、一目、一科、一属、一種となっている。

【分布の概要】

【県内の分布】

茶臼山の頂上附近（標高 1,415m）の1地点のみ。

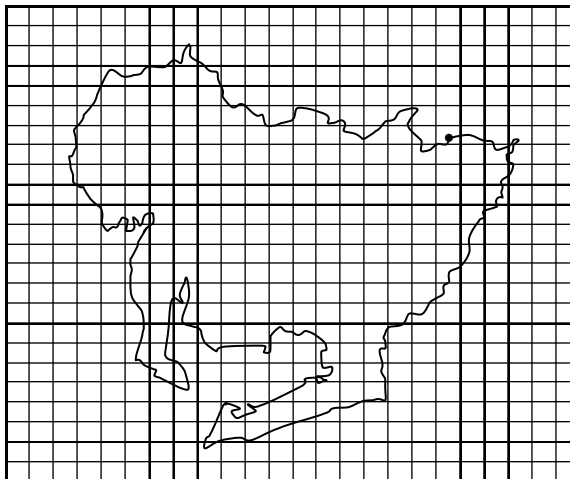
【国内の分布】

中部地方以北の高地に広く分布し、南限として岐阜県笠置山、愛知県茶臼山が知られている。しかし稀な例として、ときに標高の低い所にも出現する。東京都では皇居の石垣、埼玉県では吉見百穴、長野県では伊那の光前寺などが知られている。

【世界の分布】

アムール、欧州、北米等に分布する。

県内分布図



【生育地の環境 / 生態的特性】

生育地は、光条件の上で維管束植物の生育限界を越えた半陰の洞穴入口、倒木の根の陰など雨水のかからない土上に生育する。

【現在の生育状況 / 減少の要因】

茶臼山頂上附近（1,415m）の巨岩群の間隙の土上に生育する。愛知県と長野県との境界にまたがる極めて限られた場所にかろうじて生育している。

【保全上の留意点】

前述のとおり、極めてデリケートな条件下にかろうじて生育しているもので、わずかな人為的攪乱で容易に消滅するおそれがある。このため生育地の環境維持には細心の配慮が必要である。

【特記事項】

光の乏しい陰地に生育する興味ある蘚類であり、一科一属一種という分類学的にも貴重な種である。

【関連文献】

高木典雄, 1983. ヒカリゴケの南限産地など. しだとこけ, (岩槻先生東大歓送記念号): 5-8.

タチチョウチンゴケ *Orthomnion dilatatum* (Mitt.) P.C.Chen

【選定理由】

チョウチンゴケ科の中でも形態的に極めて特徴のある種で、その分布も限られており、全国レベルでも絶滅危惧Ⅰ類に選定されている。県内での既知の産地は4ヶ所にすぎないが、そのうちの2ヶ所では既に消滅している。分布上貴重な種であるため、全国レベルでの評価に準じて選定種とする。

【形態】

チョウチンゴケ科の多くの種が岩上や地上に生育し、蒴は長い蒴柄の上に傾くか下垂するものが大部分であるが、本属の種は概ね樹皮に着生し（稀に岩上）蒴柄は短く、蒴はその上に直立するという特殊な形態をもっている。

【分布の概要】

【県内の分布】

鳳来寺山の2ヶ所、豊田市（旧旭町）の2ヶ所、合計4ヶ所である。しかし、うち2ヶ所では消滅し、その後、新たな産地の追加はない。

【国内の分布】

伊豆以南の本州、四国、九州に分布する。

【世界の分布】

東南アジア各地に分布する南方系の種である。

【生育地の環境／生態的特性】

県内既知の産地はいずれも自然度の高い常緑広葉樹林内の老木の樹幹である。林内湿度が高く、樹冠からの木洩れ日を利用する半陰光下に生育する種である。

【現在の生育状況／減少の要因】

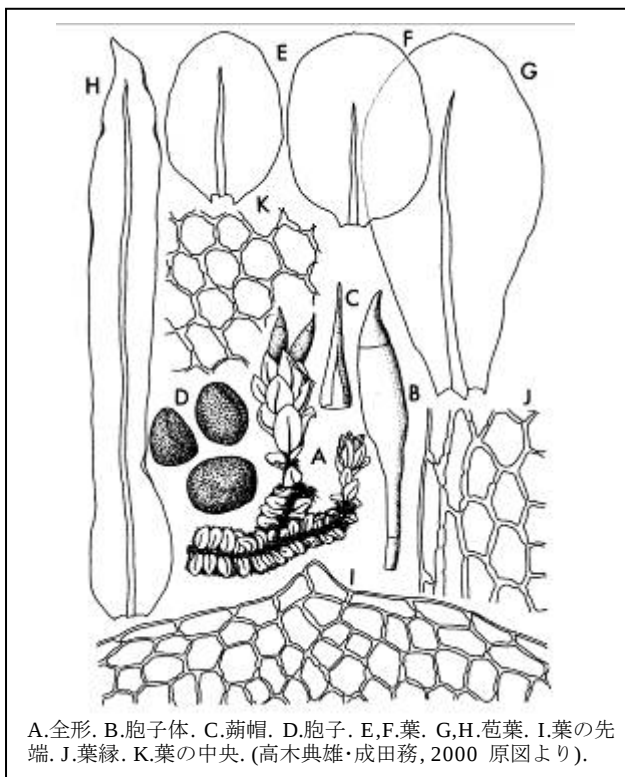
県内既知産地4ヶ所の内、豊田市（旧旭町）の1ヶ所は矢作ダムの水底に没し、鳳来寺山中の1ヶ所では着生樹（アラカシ）は健在であるにもかかわらず、樹幹に生育していた本種は消滅し、鳳来寺山の他の1ヶ所では不明である。鳳来寺山の場合は、人によって採取された形跡はないため、おそらく林内環境の乾燥化によるものと思われる。

【保全上の留意点】

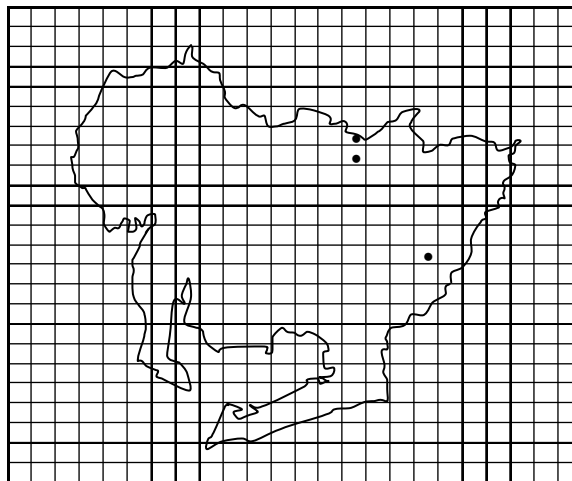
樹幹着生の種は、その生育を支えている母樹そのものが消滅すると着生種も消滅するため、母樹の保護が重要である。また、林内環境の変化にも敏感であるため、その保全には細心の配慮が必要である。

【関連文献】

高木典雄・成田務, 2000. 姿を消したと思われる鳳来寺山蘚類の3種. 鳳来寺山自然科学博物館館報, 29: 5-6.



県内分布図



クロカワゴケ(シミズゴケ) *Fontinalis antipyretica* Hedw.

【選定理由】

本種は全国レベルでも絶滅危惧Ⅱ類に選定されている淡水産蘚類である。汚泥のない清流に生育する稀産種で、河川汚濁の指標植物として利用される。県内の産地は今迄に只 1 ヶ所江南市で採集されただけの稀産種である。

【形態】

ときに 30cm に達する長い茎を流水中に漂わせて生育する。茎は不規則に分岐し、葉は 3 列に着き、それぞれの葉は縦に折りたたんだようになっている。中肋はない。全体が黒褐色を帯び（和名のクロはこの色に基づく）胞子体をつけることは滅多にない。

【分布の概要】

【県内の分布】

今迄に知られた県内の唯一の産地は江南市宮田町の宮田用水である。

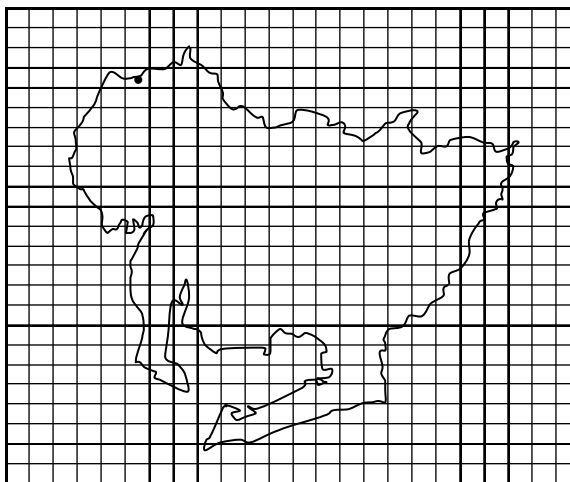
【国内の分布】

北海道から本州にかけて分布する。

【世界の分布】

アジア、欧州、北米、アフリカ北部等にわたって、汎世界的に分布する。

県内分布図



【生育地の環境 / 生態的特性】

常時、緩やかな流れのある用水などの水面下に漂いながら生育する。シミズゴケの別名があるように汚濁のない流水中に生育するもので、良好な河川水質の指標種でもある。

【現在の生育状況 / 減少の要因】

今迄に知られている県内唯一の産地は江南市の宮田用水であるが、発見者脇田晴美氏は既に故人なので、正確な採集地点は不明である。地元の研究者に依頼して探査してもらったが再発見できないでいる。

【保全上の留意点】

シミズゴケの別名があるように汚濁のない流水中に生育する蘚類であり、河川水質の保全が重要である。

【特記事項】

蘚類の仲間には海産はないが、淡水産にはいくつかの種類があり、汚濁に耐えるものから弱いものまで段階があり、今後水質判定の指標としての利用が期待される。日本産のカワゴケ属 (*Fontinalis*) には 2 種が知られているが、その何れも河川汚濁の有力な指標になるもので、クロカワゴケも含めて本属、種の新たな生育地の発見が期待される。

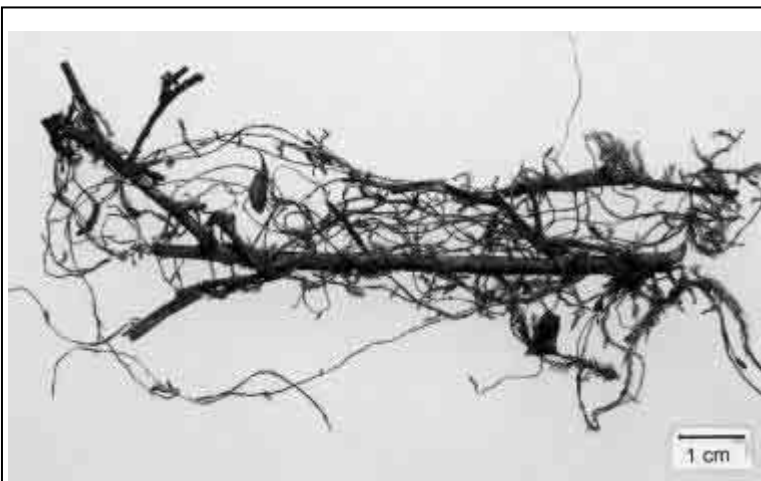
イトゴケ *Neodicradiella pendula* (Sull.) W.R.Buck

【選定理由】

植物体は和名のように糸状で、渓谷の樹木の枝から垂れ下がる。このような懸垂性の蘚類は湿度の高い環境の指標植物と考えられている。本種は愛知県では稀で、豊田市王滝渓谷のみから記録されている。このような理由で、今回絶滅危惧ⅠA類に指定し、保護を図る必要がある。

【形態】

植物体は糸状で、渓谷沿いの樹木の枝から長く垂れ下がる。葉は卵状楕円形の基部から細く漸尖し、中肋は細いが、葉の中央以上に達する。葉身細胞は線形—長菱形、それぞれの細胞に2—4個の小さなパピラが1列に並ぶ。



豊田市王滝渓谷，岩月善之助 No.20598.

【分布の概要】

【県内の分布】

豊田市王滝渓谷の1個所のみ。

【国内の分布】

本州以西に分布するが、稀。

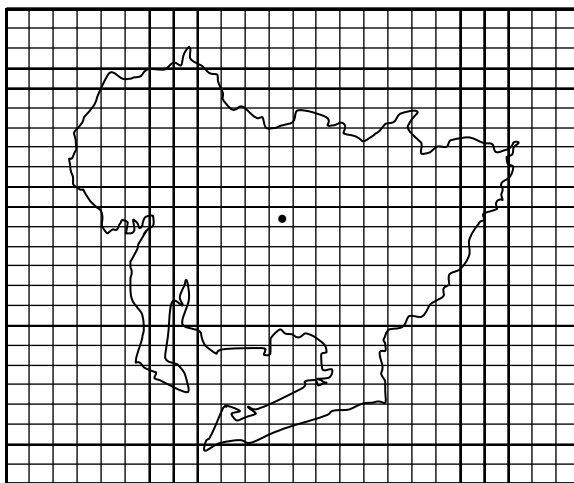
【世界の分布】

中国、北米南部、メキシコ、など。

【生育地の環境／生態的特性】

県内既知の産地は自然度の高い渓谷の樹木上である。林内湿度が高く、樹冠からの木洩れ日を利用する半陰光下の種である。

県内分布図



【現在の生育状況／減少の要因】

豊田市王滝渓谷の渓流沿いの樹木から、糸状に垂れ下がる。本種は湿度の高い場所を好むので、樹木の伐採は禁物である。

【保全上の留意点】

林内環境の変化にも敏感であるため、その保全には細心の配慮が必要である。

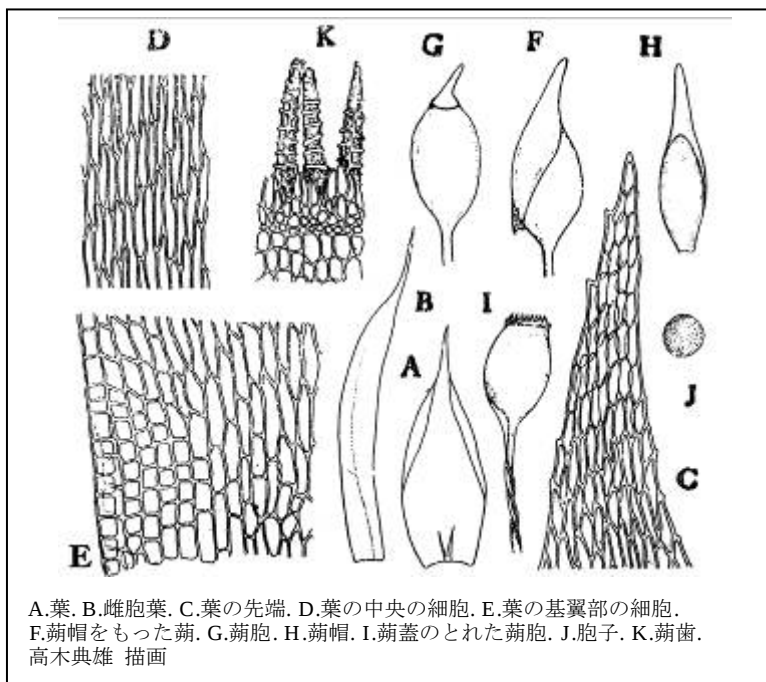
オオミツヤゴケ(サクライゴケ) *Entodon conchophyllus* Cardot

【選定理由】

本種は最初、桜井久一氏によって伊豆の日金山で発見され、属の学名もはじめ *Sakuraia* とされた。県内では只 1 ヶ所、本宮山の山頂近くから記録されている。県内の既知産地が極めて少ないことに加え、全国レベルでも絶滅危惧Ⅱ類に選定されている。県でも絶滅危惧種として見守っていく必要がある。

【形態】

ツヤゴケ属 (*Entodon*) の他の種とちがって蒴が球形をなすこと（他の種では円筒形）、胞子が大きく径 35–55 μm に達すること（オオミの名はこれに基づく）など、変わった特徴をもっている。



【分布の概要】

【県内の分布】

豊川市（旧宝飯郡一宮町）にある本宮山の頂上（789m）近くにある砥鹿神社奥宮の裏、モミの樹幹に着生しているのが記録された。その後、県内のどこからも産地の報告がない稀産種である。

【国内の分布】

本州から九州にかけて稀産する。

【世界の分布】

中国にも分布することが報告されている。

【生育地の環境 / 生態的特性】

生育地は本宮山頂上近くのモミの林であり、一帯はモミの大木が連立する疎林で、明るい林内環境となっている。モミの樹幹は直幹で、本種はおよそ人の身長位の高さに密着するように生育していたが、現在では消滅した模様である。モミの大木は県内各所にあるが、本種は他では記録されていない。

【現在の生育状況 / 減少の要因】

本宮山の山頂一帯は電波関係諸施設、駐車場等の建設で環境が大きく変わり、本種の着生樹であったモミは依然として残っているが、その後の調査でも本種の着生を確認することができなかった。かろうじて 1 本のモミに着生した断片が採集できたが、胞子体がなく本種であるとの確認がとれなかった。

【保全上の留意点】

最初の記録地（本宮山山頂）の例からも、生育地周辺の樹木の伐採や施設工事などにあたっては環境への十分な配慮が必要である。今後、本宮山山頂で再発見の期待がもたれない以上、県内での第 2、第 3 の新しい産地の発見が望まれる。

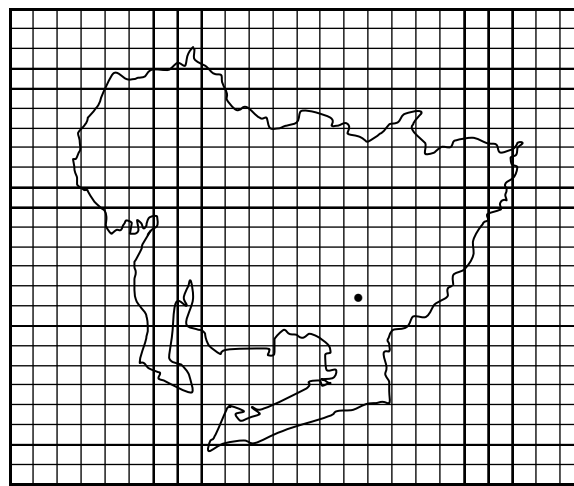
【特記事項】

本種に対して属の学名は最初 *Sakuraia* と命名されたが、現在でも、これを用いる学者もある。

【関連文献】

高木典雄, 1949. 日本産蘚類植物報告(I). 植物研究雑誌, 23 (1-2): 5-12.

県内分布図



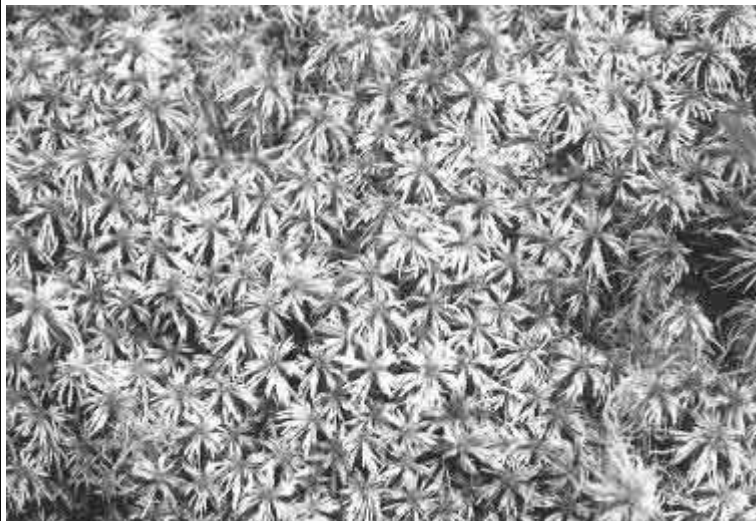
ホソバミズゴケ *Sphagnum girgensohnii* Russ.

【選定理由】

本種は県内ではウロコミズゴケと共に只1ヶ所、北設楽郡設楽町の段戸山と上津具のみに知られているミズゴケの一種である。寒地系のミズゴケで日本中部高地には多産するが、愛知県では稀である。分布上貴重な種であるため、保全に留意する必要がある。

【形態】

植物体は細長く、側方に出る枝よりも茎に沿って下垂する枝がずっと長いという特徴がある。葉を顕鏡すると、枝葉は細長く伸びるが（ホソバの名はこの特徴に基く）、茎葉は幅が広く、先端がささくれているので鑑別できる。



植物体、北設楽郡設楽町段戸山、高木典雄 撮影

【分布の概要】

【県内の分布】

段戸山と上津具のみに知られている。

【国内の分布】

北海道から九州にかけて、主として高海拔の寒冷地に分布する北方要素である。

【世界の分布】

北極を取り巻いて北半球に広く分布する。

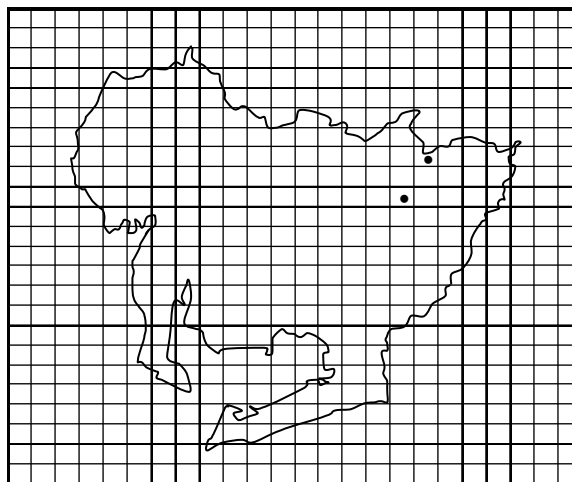
【生育地の環境 / 生態的特性】

段戸山裏谷の標高 1,000m 付近、落葉樹林内の湿地に他のミズゴケ類と棲み分けをしながら群生する。

【現在の生育状況 / 減少の要因】

段戸山裏谷における生育状況は、その生育場所を探すのに苦労するほど出現頻度が少なくなっている。

県内分布図



【保全上の留意点】

種の形態が園芸用として利用価値が高いオオミズゴケに似ており、しかも同一場所に棲み分けていることから乱獲の対象となることが予想される。

【特記事項】

国外全体からみると、北半球の寒冷地に広く分布するが、愛知県の蘚類フロラの性格を論ずる場合には一つの重要な資料となる種である。

【関連文献】

高木典雄, 1996. 蘚類植物. 設楽町誌自然本文編, pp.346-368. 設楽町.

ウロコミズゴケ *Sphagnum squarrosum* Crome

【選定理由】

本種は県内では北設楽郡設楽町の段戸山にのみ知られているミズゴケの一種。高冷地の湿原構成の一要素で、現地では普産種のオオミズゴケと同一場所に棲み分け群落を作っている。産量が少なく、一時段戸山でも絶滅と考えられたが、最近になってかろうじて生育しているのが記録された。

【形態】

オオミズゴケとよく似た大型のミズゴケであるが、枝葉の形が円状卵形の基部から急に細くとがり、先端が背方に反りかえる特徴があり、株全体がとげとげしい外観を呈する。ウロコミズゴケの名はその様子に基づいたもので肉眼でも判定できる。



植物体。北設楽郡設楽町段戸山, 2000 年, 高木典雄 撮影

【分布の概要】

【県内の分布】

県内の唯一の産地は段戸山（北設楽郡設楽町）の標高約 1,000m の地点。

【国内の分布】

北海道から本州にかけての高冷地に分布する北方要素の一種である。

【世界の分布】

北半球に広く分布する北周極要素の一種である。

【生育地の環境 / 生態的特性】

段戸山裏谷の標高 1,000m 付近の林内凹所に他の灌木類や、オオミズゴケ等と共に湿原構成の一要素となっている。高冷地湿原の性格を表示する構成要素の一種として重要。

【現在の生育状況 / 減少の要因】

過去の正確なデータが残っていないため比較できないが、現地で見受けられる生育量の少ないことからみて、衰退の方向にあるものと思われる。

【保全上の留意点】

園芸用として利用価値が高いオオミズゴケと同じ湿地内に生育しているため、オオミズゴケと一緒に持ち去られるおそれがある。本種の共存している湿地については、より一層の注意が必要である。

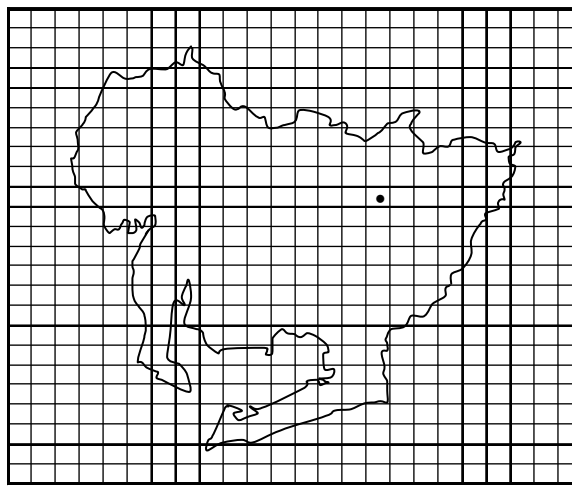
【特記事項】

愛知県の蘚類フロラの性格を論ずる場合に、北方要素的な性格が含まれていることを証明する重要な資料となる種である。

【関連文献】

高木典雄, 1996. 蘚類植物. 設楽町誌自然本文編, pp.346-368. 設楽町.

県内分布図



コバノイクビゴケ *Diphyscium perminutum* Takaki

【選定理由】

本種は愛知県北設楽郡豊根村川宇連にある尹良神社（茶臼山の東麓）の境内で1950年7月25日に発見され、新種と認定され、植物研究雑誌に上記の学名で発表された。以後、県内では鳳来寺山、県外では数ヶ所の産地で知られているのみの稀産種である。

【形態】

日本産イクビゴケ属には9種が知られているが、本種は中でも最小の種であり、胞子体がなければ発見は困難である。小さいということ以外に、葉が線形で内雌苞葉も極めて小さく、縁辺は中央以上において鬚毛状に細裂するという点があり、これにより日本産イクビゴケ属の他の種から区別することができる。

【分布の概要】

【県内の分布】

前述の豊根村川宇連の他に、鳳来寺山（新城市）参道入口左側の溪流周辺の岩上から記録されているのみである。

【国内の分布】

熊本県人吉市のカナメの滝、高知県幡多郡西土佐村、鹿児島県徳之島、沖縄県石垣島等で記録されている。

【世界の分布】

日本の固有種である。

【生育地の環境 / 生態的特性】

生育地の一つ尹良神社の社叢は、ハナノキの群生地であり、国指定の天然記念物となっている。この社叢の一角、半陰地の湿りのある岩塊上に生育している。

【現在の生育状況 / 減少の要因】

本種は原産地、尹良神社の一角にある岩は、林内の乾燥のためか、すっかり乾いており、本種も消滅した。

しかし、最近になって周辺林内の精密調査により、別な場所であらうじて確認された。鳳来寺山の生育地でも、最初の場所では消滅し、近傍の別な場所で再確認された。

【保全上の留意点】

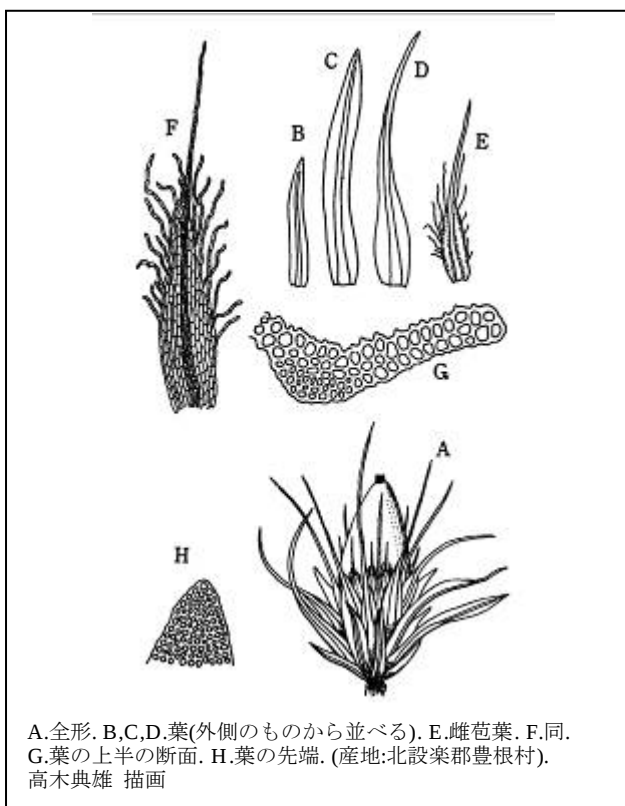
本種のような小型な種は、観賞用として採取される心配はないが、環境が変われば容易に消滅する。生育していた岩石そのものは残ったにしても、周辺の伐採、道路建設などのわずかな環境変化でも消滅するため慎重な配慮が必要である。

【特記事項】

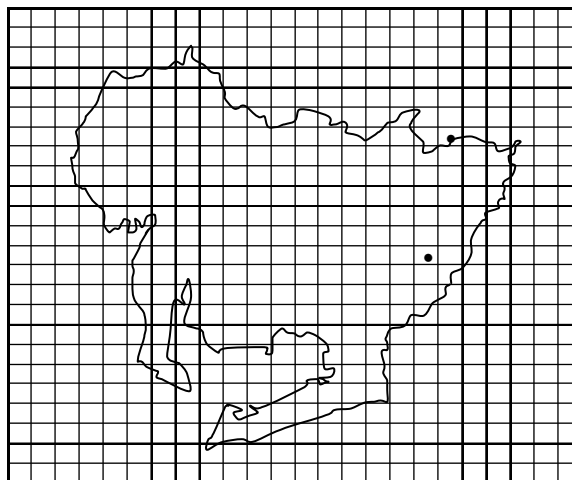
本種は北設楽郡豊根村尹良神社境内で発見された標本をタイプ標本として、高木（1950）によって新種として発表されたもの。

【引用文献】

高木典雄, 1950. 日本産蘚類植物報告(3). 植物研究雑誌, 25 (8): 25-26.



県内分布図



イボタチゴケモドキ(ハグルマゴケ) *Oligotrichum aligerum* Mitt.

【選定理由】

県内ではこれまでに只1回、北設楽郡設楽町の「面ノ木峠」西方の路傍で記録された。本種は日本では亜高山帯や高山帯に多い種であるが、設楽町内に出現するのは異例のことと考えられる。本種の生育限界を示す例証であると同時に愛知県の蘚類フロラの性格を示すものとして重要である。

【形態】

本種はハグルマゴケの別名があるように、葉を横断して検鏡すると、薄板列（ラメラ）が葉の表面だけでなく葉背部にもあって、葉身断面の形が歯車状になっている。これは蘚類の中でも珍しい形態である。

【分布の概要】

【県内の分布】

これまでに只1回、北設楽郡設楽町の「面ノ木峠」西方の路傍で記録された。

【国内の分布】

北海道から九州まで知られているが、本拠は亜高山帯もしくは高山帯である。九州、四国では高標高の所に限られる。

【世界の分布】

朝鮮半島、中国、台湾、フィリピン、ヒマラヤ、北米に分布する。

【生育地の環境 / 生態的特性】

本種の生育地は高山帯や亜高山帯の粘土質の土上であるが、本県での産地は、ある程度日照に恵まれた軟らかい粘土からなる路傍の斜面であった。現在、現地では消滅している模様。

【現在の生育状況 / 減少の要因】

県内で記録されたのは北設楽郡設楽町の面ノ木峠西方における一例のみで、しかも移動性の高い土壌斜面に生育したもので、現地では消滅した模様。

【保全上の留意点】

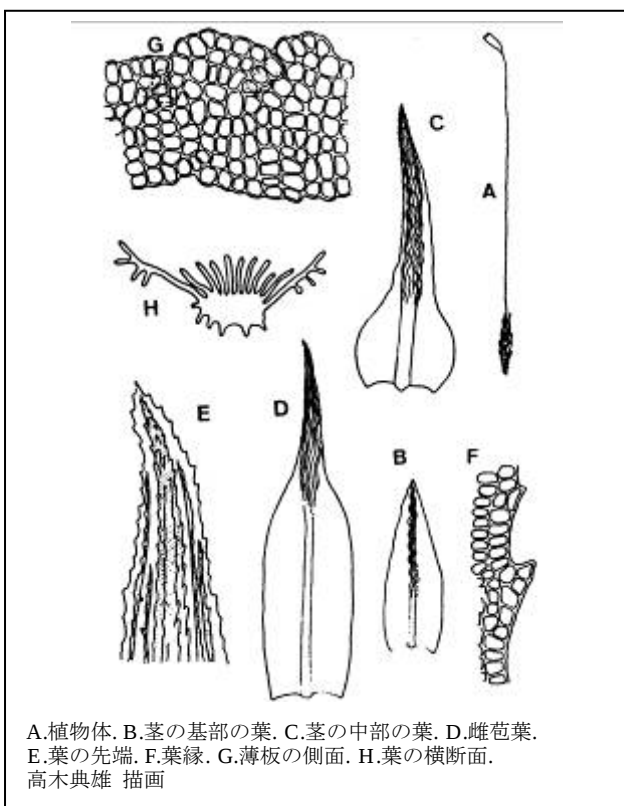
移動しやすい不安定な土上に生育する種だけに、生育地の環境を恒常的に維持することは困難である。今後、同様な環境下での再発見が期待される。

【特記事項】

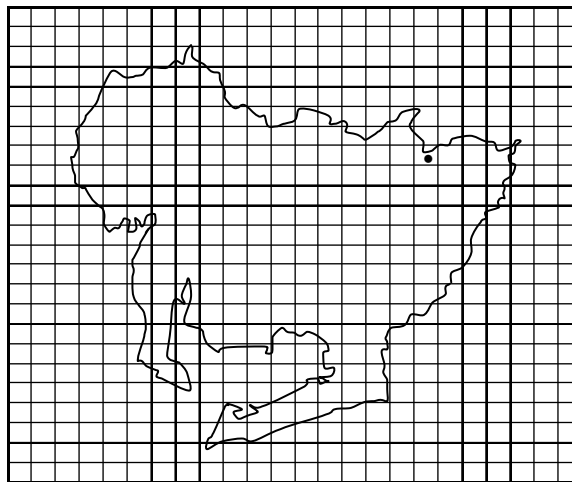
全国的にみると、高山帯、亜高山帯に広く分布し、決して珍しい種ではない。県内では只1ヶ所で1回のみ記録されている高冷地の種である。これは愛知県の蘚類フロラの中に寒地系の要素が入り込んでいる証拠として重要である。

【関連文献】

高木典雄, 1996. 蘚類植物. 設楽町誌自然本文編, pp.346-368. 設楽町.



県内分布図



アオゴケ *Saelania glaucescens* (Hedw.) Broth.

【選定理由】

本種は一般に高地の地上や岩上に生育するが、本県の場合は 100m 程度の低標高の所に 2 ヶ所、極めてまれな例として記録されている。記録場所の一つは耕作地の土手であり、本種の性格については未知の点が多く、分類学的にも分布学的にも興味ある稀産種である。

【形態】

和名にも学名にも青色を示す名前が用いられているように、茎や葉が青白い色をしていて、肉眼でも判別できる変わった特徴を持っている。

【分布の概要】

【県内の分布】

今迄に知られている産地は、北設楽郡豊根村豊根口付近（標高 120m）と豊田市（旧旭町）の矢作川沿岸（標高 100m）の 2 ヶ所のみである。

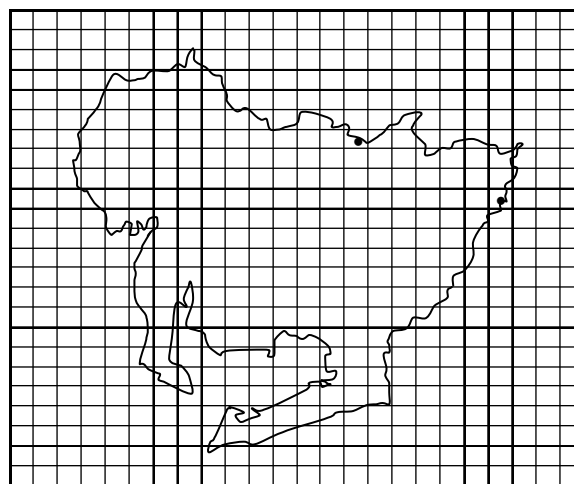
【国内の分布】

北海道から本州にかけて主として高地に分布するが、稀に低標高の地にも産する。

【世界の分布】

欧州、南アフリカ、アジア、北米、グリーンランド、ハワイ、ニュージーランドに分布する。

県内分布図



【生育地の環境 / 生態的特性】

本種は高冷地の種であるが、県内では低地に出現する。県内の生育地はいずれも人為的な攪乱に曝されやすい場所の土上で、豊根村の産地では天竜川に面した川畔の岩隙に、旭町の産地では水田地帯の農道横の草地に生育していた。本種の生態については今後、解明すべき問題が残されている。

【現在の生育状況 / 減少の要因】

現在では県内の生育地 2 ヶ所とも、現地での再確認ができない。人為的攪乱によって消滅している模様で、保存されている標本によって産地と実体が確認されるのみである。県内における新たな産地の発見が期待される。

【保全上の留意点】

発見地では再確認がなされていない。同様な環境を有する場所をもっと広い範囲で探索する必要がある。

【特記事項】

生態的に解明すべき問題を有する県内稀産の種であり、県内からのより多くの産地の記録と現場の観察が望まれる。本種の示す特異な青色は菌糸の寄生と考えられていたが、最近の研究では特殊な化学物質ではないかと考えられている。

【関連文献】

高木典雄, 1995. 愛知県における蘚苔類. 愛知県の植物相, pp.230-246. 愛知県農地林務部自然保護課.

ナミガタチョウチンゴケ *Plagiomnium confertidens* (Lindb. et Arn.) T.Kop.

【選定理由】

日本中部亜高山帯の針葉樹林の林床に生育する本種が、愛知県の最高点茶臼山（1,415m）の頂上附近に生育している。中部高山地帯からかろうじて本県内まで下降しているものとして、重要である。

【形態】

高さ 4～8cm の比較的大型のチョウチンゴケの一種。胞子体をつけない茎は上部でよく湾曲する。葉は舌形で大形、長さ 7～9mm、乾くと著しく巻縮する。葉面は湿っていても強く波打つ特徴があり、ナミガタの和名はこの性質に基づくもので、極めて特徴のある蘚である。

【分布の概要】

【県内の分布】

県内での唯一の産地は茶臼山の頂上附近（標高 1,415m）。

【国内の分布】

本州中部の亜高山帯に分布する。

【世界の分布】

シベリアからヒマラヤ地方の寒冷気候下に分布する。



茶臼山, 高木典雄 No.12936.

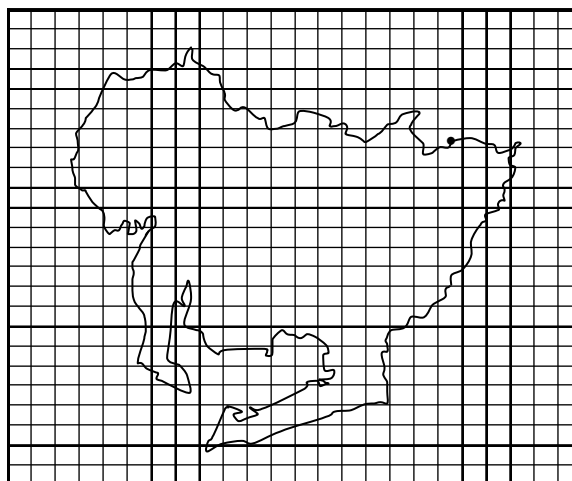
【生育地の環境 / 生態的特性】

国内における主産地は亜高山帯の針葉樹林の林床であり、半陰地の腐植の多い土上に群生する。亜高山帯林床における蘚苔群落の主役の一種である。県内唯一の産地茶臼山では針葉樹の生育する温帯林の林床腐植土上にわずかに確認されている。

【現在の生育状況 / 減少の要因】

茶臼山の頂上附近にかろうじて発見されている。この場所は、本種の垂直的な生育限界からみると下限に近いところで、かろうじて生育している程度である。

県内分布図



【保全上の留意点】

生育地は天竜奥三河国定公園の中にあり、地域的には保護の対象となっているが、茶臼山の頂上附近（標高 1,415m、県内最高点）で、登山者の集中するところでもある。このため、登山道や展望台の施設工事等で絶滅するおそれもあり、現状改変には注意を要する。蘚苔類の保全においては、生育地の環境全体はもとより、一つの岩、一つの樹木といった微小空間への配慮が求められる。

【関連文献】

高木典雄, 1995. 愛知県における蘚苔類. 愛知県の植物相, pp.230-246. 愛知県農地林務部自然保護課.

エゾチョウチンゴケ *Trachycystis flagellaris* (Sull. et Lesq.) Lindb.

【選定理由】

エゾの名が示すように寒地系のチョウチンゴケの一種で、県内の産地は奥三河高原地帯に点々と知られているのみの稀産種である。分布上、愛知県の蘚類フロラが中部高山地帯と関連していることを示す指標的意味をもつもので、保護を要する蘚類である。

【形態】

最も大きな特徴は茎の先端に多くの細い棒状の無性芽をつけることで、肉眼でも判別できる種である。チョウチンゴケの仲間であるが葉身細胞に明瞭な乳頭があるので特別な一属コバノチョウチンゴケ属 (*Trachycystis*) に所属する。

【分布の概要】

【県内の分布】

茶臼山の頂上附近や、山麓の尹良神社境内、段戸山本谷、津具村スケート場附近から記録されている。

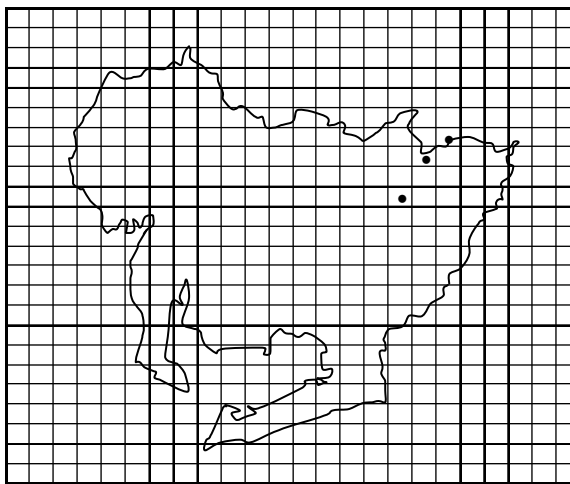
【国内の分布】

北海道から九州に分布する。九州では久住山、霧島山に知られている。

【世界の分布】

サハリン、アムール、シベリア、朝鮮半島、中国からベーリング海峡を越えて北米西部に分布する。

県内分布図



【生育地の環境 / 生態的特性】

奥三河高原地帯の温帯林下、腐りかかった倒木上や、腐植質に覆われた岩上などに群落を作る。

【現在の生育状況 / 減少の要因】

奥三河高原地帯に点々と分布しており、場所によっては開発の犠牲になりかねない所もあるが、比較的産量も多いので、今のところ絶滅のおそれはないと思われる。

【保全上の留意点】

蘚苔類の保全においては、生育地の環境全体はもとより、一つの岩、一本の樹木といった微小空間への配慮が求められる。

【特記事項】

本種は愛知県の蘚類フロラの中に、ベーリング要素が入り込んでいる証拠として、学術的に重要である。

【関連文献】

高木典雄, 1996. 蘚類植物. 設楽町誌自然本文編, pp.346-368. 設楽町.

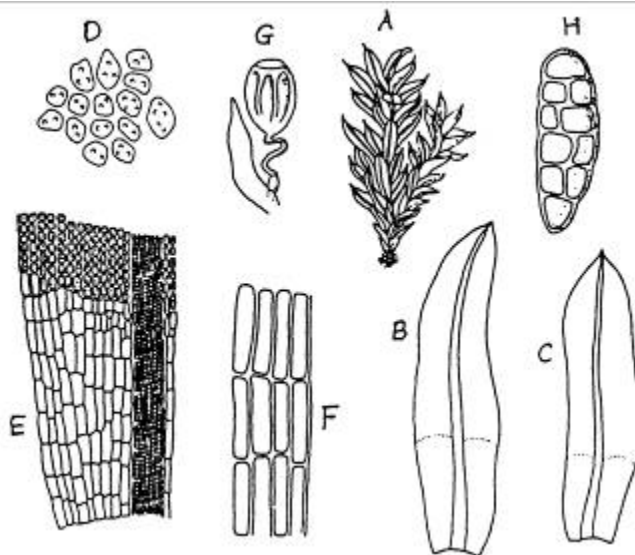
キサゴゴケ *Hypnodontopsis apiculata* Z.Iwats. et Nog.

【選定理由】

本種は樹幹に着生する小型の蘚類で、最初に宮崎県日南市で発見され、新属、新種として発表された稀産の種である。県内では新城市と犬山市だけから記録されている。樹皮着生種であり、稀産の種だけに少しの環境の変化でも絶滅の心配があり、新しい産地の発見が期待される。

【形態】

小型の種で茎は短く、高さ 2～3mm。蒴柄も短く、螺旋状に巻く（キサゴゴケの名は巻き貝のキサゴに基づく）。蒴柄の断面を鏡検すると外側の 2 列の細胞のみが著しく厚膜になる。蒴歯には柵状の肥厚があるなど特異な形質の持ち主である。



A.植物体(高さ2～3mm). B,C.葉. D.葉の中央の細胞. E.葉の基部.
F.葉翼の細胞. G.胞子体. H.無性芽.
高木典雄 描画

【分布の概要】

【県内の分布】

新種として最初に命名されたときの産地（タイプ産地）は宮崎県日南市であるが、第2の産地は、愛知県犬山市である。第3の産地は同じく愛知県新城市であり、愛知県に縁の深い種である。

【国内の分布】

中部地方以西、九州まで分布するが、稀な種である。

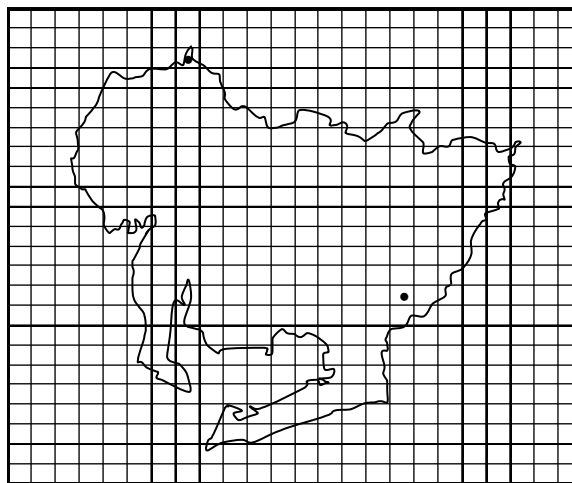
【世界の分布】

日本固有種である。

【生育地の環境 / 生態的特性】

犬山城の場合は犬山城内のスギ樹皮に、新城市の場合は永住寺という寺の境内で同じくスギ樹皮に、タイプ産地の日南市の場合もスギ樹皮上で確認された。いずれの産地も町中の植樹されたスギ老樹の幹というのが面白い。

県内分布図



【現在の生育状況 / 減少の要因】

犬山城では現状不明である。新城市永住寺の場合は健在であるが、量が減少している。原因は境内の環境の乾燥化と思われるが、酸性雨あるいは町の中ということで大気汚染が関与している可能性もある。

【保全上の留意点】

全国的に稀産種であり、県内の産地である犬山城、永住寺については全国的にみても第2、第3の発見地であり、今後の生育状況を見守る必要がある。樹皮着生種なので、その着生樹そのものを保全する必要がある。

【特記事項】

県内での発見地は現在2ヶ所のみであるが、この2ヶ所は人の来訪の多い古城や寺院内のスギの樹幹であり、同じような環境の場所を探索することにより、新たな産地の発見が期待される。

【関連文献】

高木典雄, 1959. キサゴゴケの新産地. 蘚苔地衣雑報, 1 (20): 5-6.

ホソミノゴケ *Macrocoma tenue* (Hook. et Grev.) Vitt subsp. *sullivantii* (Müll.Hal.) Vitt

【選定理由】

県内では稀産の種で、只1ヶ所、北設楽郡設楽町の田口附近で記録されている。老木の幹に着生する種で、日本産としては1属1種で形態的にも特徴のある種である。

【形態】

本種は、はじめミノゴケ属 (*Macromitrium*) のものとして扱われていたが、数多いミノゴケ属のものとは著しく外観が異なる。枝は羽状に分岐し細く横に伸びる。葉は乾いても縮れず茎や枝に密着するのでより細くみえる。またミノゴケ属では葉身細胞に乳頭があるが本属の葉身細胞は平滑である点も変わっている。



田口町(現設楽町田口), 岩月善之助 No. 45381.

【分布の概要】

【県内の分布】

県内の唯一の産地は北設楽郡設楽町で、田口と百田の間で記録されている。

【国内の分布】

本州から九州に分布する。

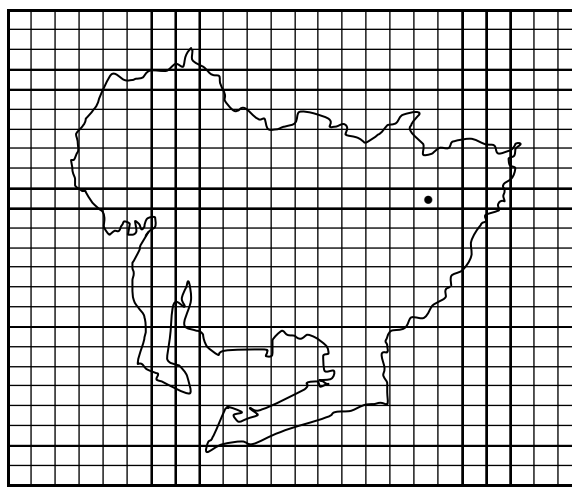
【世界の分布】

朝鮮半島、台湾、中国、北米東部、南米に知られている。

【生育地の環境 / 生態的特性】

日光のよく当たる山間の開豁地で、畑地に残っている老樹の幹に着生することが知られているが、発見例が少ないため、詳しい生態は不明である。今後新たな産地の発見と、それを通しての生態上の共通性を探る必要がある。

県内分布図



【現在の生育状況 / 減少の要因】

県内の唯一の産地は北設楽郡設楽町山間畑地で、環境的に比較的安定した条件下にある。附近一帯の樹幹のいずれかに残存しているものと思われる。

【保全上の留意点】

樹幹着生の種は、その生育を支えている母樹そのものが消滅すると着生種も消滅するため、母樹そのものの保護が重要である。しかし、それも期待できない場合が多いので、同一環境にある周辺の老樹について調査を広げ、県内における第2、第3の産地の発見が望まれる。

【特記事項】

県内では稀産の種であり、タチヒダゴケ科の中では特徴ある形態の持ち主であるということで注目される蘚類である。新しい産地の発見と、生態の解明は興味ある研究対象である。

【関連文献】

高木典雄, 1996. 蘚類植物. 設楽町誌自然本文編, pp.346-368. 設楽町.

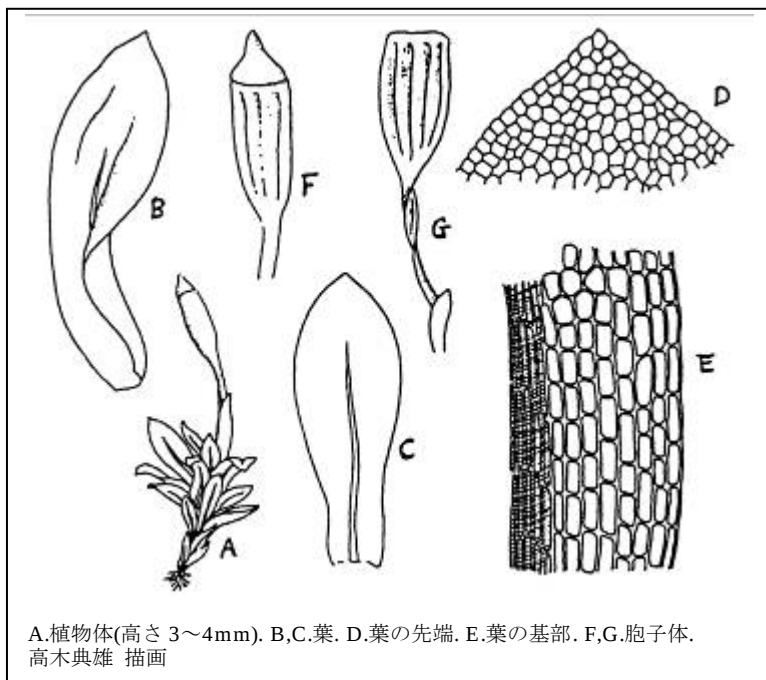
キブネゴケ *Rachithecium nipponicum* (Toyama) Wijk et Margad.

【選定理由】

日本固有の種で京都の貴船で発見され、新種として命名（1935）されたもので、和名も発見地の名に因んでいる。現在も稀産の種であり、着生母樹の多くがサクラ類の老木であるという変わった性質がある。県内での既知産地もわずかである。

【形態】

高さは3～4mmという小さな種である。主としてサクラの幹に着生、雌苞葉は鞘状になって蒴柄を包み、蒴はわずかに雌苞葉から顔を出している。蒴は直立し、縦ひだが著しい。蒴歯は欠如し、口環がよく発達する。



A.植物体(高さ3～4mm). B,C.葉. D.葉の先端. E.葉の基部. F,G.胞子体.
高木典雄 描画

【分布の概要】

【県内の分布】

新城市（旧鳳来町）の鳳来寺山参道入口と瀬戸市八王子町が既知産地であったが、鳳来寺山では消滅した。最近、同じく新城市（旧鳳来町）内の細川小学校校庭のソメイヨシノの樹幹に着生しているのが記録された。

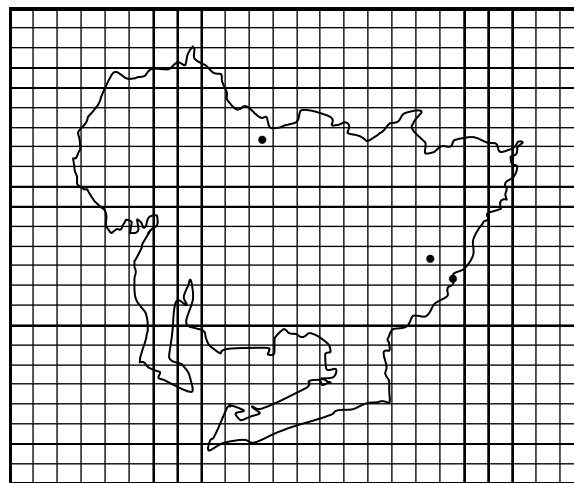
【国内の分布】

現在までに知られた産地はタイプ標本産地の京都市貴船の他、大阪市内、広島県、愛知県、静岡県等のわずかな産地である。

【世界の分布】

日本固有種である。

県内分布図



【生育地の環境／生態的特性】

本種は樹幹着生の種であるが、採集者によって着生樹種が確認されている場合はすべてサクラ（主にソメイヨシノ）である。そのサクラも主として路傍や運動場など解放地のサクラであるのも特徴的である。

【現在の生育状況／減少の要因】

既知産地の一つであった新城市（旧鳳来町）鳳来寺山参道入口では消滅した。しかし、最近同じ新城市（旧鳳来町）の細川小学校校庭のサクラ（ソメイヨシノ）の樹幹で記録された。

【保全上の留意点】

樹幹着生の小型なので乱獲される心配はないが、樹幹着生の種は、その生育を支えている母樹そのものが消滅すると着生種も消滅するため、母樹そのものの保護が重要である。また、新たな産地発見の可能性は残されているため、県内における新たな産地の発見が望まれる。

【特記事項】

今後、新たな産地を発見するためには、路傍や運動場など人里もしくは人里近くの解放地のサクラ（ソメイヨシノ）を中心として調査を進める必要がある。

【関連文献】

高木典雄・成田務, 2000. 姿を消したと思われる鳳来寺山蘚類の3種. 鳳来寺山自然科学博物館館報, 29: 6-7.

フジノマンネングサ *Pleuroziopsis ruthenica* (Weinm.) Kindb.

【選定理由】

県内では最高点、北設楽郡豊根村の茶臼山（1,415m）の頂上周辺にのみ、その生育が知られている。ベーリング海峡を挟んで両大陸の北方に分布する種で、南下の一部が本県へ達しているものと考えられ、重要な稀産種である。

【形態】

大形の美しい蘚。茎は2回又は3回羽状に細く分岐して樹状となる。蘚としては有名なコウヤノマンネングサと形状がよく似るが、科が異なる（同科異属とする場合もある）。コウヤノマンネングサでは蒴は直立するが、フジノマンネングサでは蒴は湾曲する。



植物体。北設楽郡豊根村茶臼山、高木典雄 撮影

【分布の概要】

【県内の分布】

県内での唯一の産地は茶臼山の頂上周辺。

【国内の分布】

北海道から南は四国の高峰、剣山を南限とする北方寒地系の種である。本県の茶臼山の産地は本種の南下の一地点と考えられる。

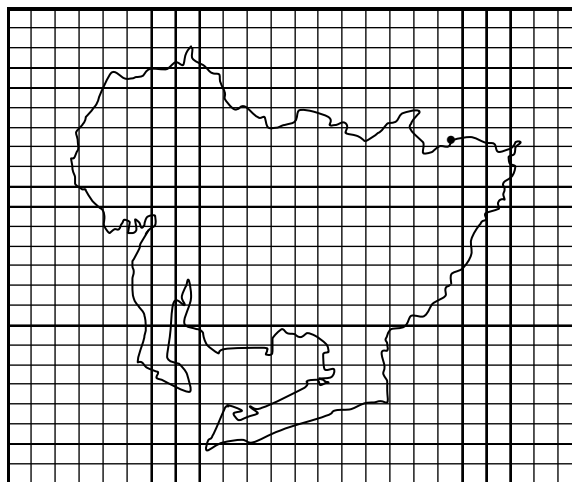
【世界の分布】

ベーリング海峡を挟んで、北米西部とシベリア、千島、樺太、朝鮮半島、日本へと分布する。いわゆるベーリング要素と称される蘚類の一種である。

【生育地の環境／生態的特性】

高冷地の温帯林下に群落を作る美しい種であり、生態学的には温帯林を指標する代表的な蘚類である。茶臼山では頂上の下、標高1,200m 付近の温帯林の林床に記録されている。被陰地の腐植土上や腐りかかった倒木上に生育している。

県内分布図



【現在の生育状況／減少の要因】

日本中部の高地（長野県、静岡県など）に広く分布するが、その余波として県内では茶臼山の頂上近くに県内唯一の産地として、かろうじて生育している。

【保全上の留意点】

本種の県内唯一の産地である茶臼山頂上周辺は、県内の最高地点としてスキー等各種レジャーに利用されており、一帯の植生はその地表層も含めて厳重な監視が必要である。

【特記事項】

本種は、愛知県の蘚類フロラの中に、ベーリング要素が入り込んでいる証拠として学術的に重要である。

【関連文献】

高木典雄, 1995. 愛知県における蘚苔類. 愛知県の植物相, pp.230-246. 愛知県農地林務部自然保護課.

オオミミゴケ *Meteoriella soluta* (Mitt.) S.Okam.

【選定理由】

県内では只1ヶ所、北設楽郡設楽町（旧津具村）の白鳥山の山頂（968m）で記録されている。今後新たな産地の発見が期待されるが、県内稀産の種であることには変わりないものと判断される。絶滅危惧ⅠB類として見守っていく必要がある。

【形態】

長さ20～30cmにもなる懸垂性の蘚。全体が褐色から黒褐色を呈し、まばらに分枝する。枝は垂れ下がりながらも枝端は上向きに湾曲する。葉の翼部は下延して著しく耳状になるのでオオミミゴケの和名がついている。葉面は深く凹んでいる。葉身細胞は線型、厚膜でくびれがある。胞子体がつくことは稀である。

【分布の概要】

【県内の分布】

県内の唯一の産地は白鳥山（設楽町）である。白鳥山には本種と同じく愛知県の準絶滅危惧種であるタチハイゴケ、イワダレゴケも共存しており、興味深い山である。また、白鳥山は県により白鳥山自然環境保全地域に指定されている。

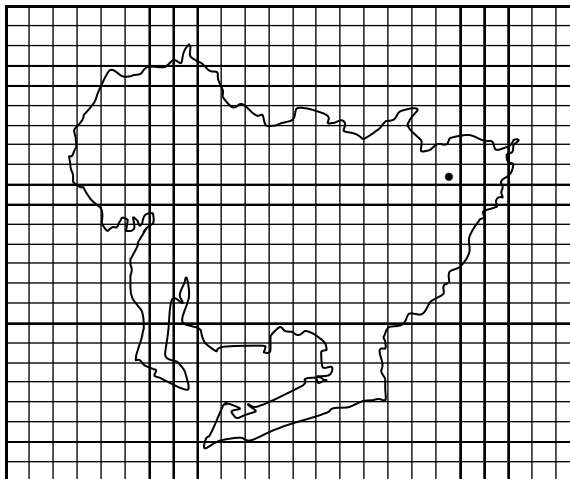
【国内の分布】

箱根山以南の本州から九州屋久島まで分布する。

【世界の分布】

中国、台湾（玉山、阿里山など）、ベトナム、シツキム、ヒマラヤにも分布する。

県内分布図



【生育地の環境／生態的特性】

冷涼な山岳地帯の樹陰下、湿った岩隙に懸垂して生育する。

【現在の生育状況／減少の要因】

白鳥山の現地では再確認の機会が得られてないが、同所は県指定の自然環境保全地域として山頂一帯が保護されているため、絶滅の心配は少ないと思われる。

【保全上の留意点】

白鳥山は愛知県指定の自然環境保全地域になっているため、不用意な開発はないものと思われる。しかし、蘚苔類の場合は微小環境下に生育しているので、人の踏みつけ、1個の岩の移動などでも自然状態の攪乱につながる場合があり、よりきめ細かな配慮が必要と考えられる。

【特記事項】

日本では箱根山以南、屋久島まで、台湾では玉山、阿里山、西はヒマラヤ等にも分布する高冷地の蘚である。愛知県蘚苔類フロアの性格を表示するものとして学術的にも貴重である。

【関連文献】

高木典雄, 1995. 愛知県における蘚苔類. 愛知県の植物相, pp.230-246. 愛知県農地林務部自然保護課.

シタゴケ *Bissetia lingulata* (Mitt.) Broth.

【選定理由】

今までに記録された県内の産地は豊田市（旧北設楽郡稲武町）にある名古屋大学附属演習林内で、落葉樹の樹皮に着生している。その後の調査でも県内他地域では未記録の種であり、絶滅危惧ⅠB類として見守っていく必要がある。

【形態】

日本産としては1属1種の蘚。葉形が特徴のある舌形をなすのでシタゴケの和名がある。葉の周縁部と中央部で、細胞がはっきりと異なるのも、本種の特徴である。葉は湿っても下方に垂れ、乾くと巻縮する。葉の基部の縁は内側に巻いて茎を抱いている。

【分布の概要】

【県内の分布】

豊田市（旧北設楽郡稲武町）にある名古屋大学附属演習林で、林内の落葉樹の樹皮に着生している。

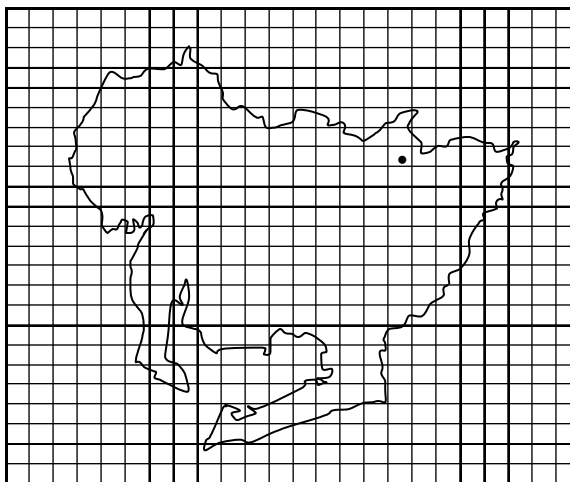
【国内の分布】

本州から四国、九州に分布する。

【世界の分布】

国外では朝鮮半島に分布する。東アジア要素と考えられる。

県内分布図



【生育地の環境／生態的特性】

樹皮着生の種であるが、稀に岩上にも生えることが報告されている。県内のものは比較的明るい二次林内の落葉樹（樹種不明）の樹皮に着生する。

【現在の生育状況／減少の要因】

最近の生育状況は確認できていないが、生育地が大学附属の演習林内であるため、環境の変化は少なく、現在も生育しているものと思われる。

【保全上の留意点】

生育地が大学附属の演習林内であるため、母樹伐採等の環境変化の危険性は少ないと思われる。また、林内の他の樹木についても着生がみられるか調査を進める必要がある。

【特記事項】

県内に産することを報告した文献はない。採集された標本は名古屋大学博物館に保存されている（No.18030, 1952年9月14日採集、採集者高木典雄）。